

たけのご幼稚園とラジオのおっちゃん(10)

しょうごもり
庄籠 道子

クリスマスには八代亜紀の巻

十二月にはいると、街はすっかりクリスマスムード。

幼稚園でも先生たちがクリスマスの歌をかけたたり、ツリーを出したりしている。

きょうは、クリスマスのリースを作るんやて。丸い輪になつとつて、いろいろかざりがついとつて、ドアとかにぶらさげるやつ。ハンガーをまげて、緑の画用紙を巻きつける。かざりも作る。赤や緑の色紙、金色のシール、色とりどりのリボン。いろんなものが用意された。カセットテープからはクリスマスの歌。だんだんクリス

マス気分になってきたぞ。

「サンタさんの顔、作ろかな」

「くつしたにしょーかな」

にぎやかにその気になってきた。細かい作業はあまり好きでないたつやもしかたがないから作り始めた。なるべく簡単にできるやつにしよ。

ん？　なんか聞こえてきた。なんか雰囲気が違うぞ。庭を見るとラジオのおっちゃんが立っている。ラジオからすごいボリュームで歌が流れている。聞いたことある

ぞ。八代重紀の『舟歌』だ。へー、おっちゃん、ラジオ
体操の曲のときだけポリュームあげるわけじゃないん
だ。おっちゃん、この歌、好きなんやな。♪……しみじ
み飲めばー、しみじみとー……♪

うん、おっちゃん、いい歌だよ、これ。だけど、今、
クリスマス気分なただけどなあ……籠先生も苦笑して
る。

「おっちゃん、おはよう」

ガラス越しにたつやが手を振ると、おっちゃんも

「よお！」

と、右手をあげた。

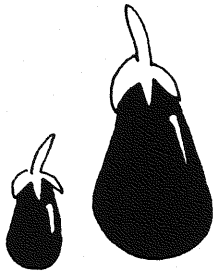
ふいとしいあのことヨ朝寝するダンチヨネ……♪

舟歌が遠ざかっていく。

「さ、私たちはクリスマス

よ」籠先生がきっぱりと言っ
た。

田原のおばちゃんがおうち



の都合で、用務員をやめた。かわりに藤田のおばちゃん
が来た。藤田のおばちゃんは、このたけのこ村で生まれ
て、ずっとたけのこ村で大きくなったそうだ。もう三十
五年もたけのこ村に住んでるわけだ。

籠先生が藤田さんに尋ねている。

「じゃあ、藤田さんが小さい時にも、ラジオのおっチャ
ん、おったん？」

「いましたよ。今と同じでした」

「えっ？ 同じ？ 三十五年前から？」

「あかちゃんの時のことはわからへんけど、私があるご
ころついたときから、おっちゃん、あんな感じてました。

いつもラジオ持ってて、いつもラジオ体操聞いてて、小

学校の運動場横切って……」

へー、籠先生がびっくりしている。

「そうか。たけのこ村のみんなが、おっちゃんが何をし
てもおどろかないはずだ。年季がはいってるんだ」

すごく感心している。そんなおおげさなことかいな
あ。

「おっちゃん、寒いなあ」の巻

寒い。雪でもふりそうな寒さだ。あいさつは、「寒いねえ」「冷えますねえ」だ。おっちゃん以外には。

おっちゃんは、夕方会つても、どんなに寒い日でも、

「おはよう。あちいなあー」である。僕たちも心得ているから、夕方会つても、どんなに寒い日に会つても、

「おっちゃん、おはよう。あちいなあー」と言う。

だけど、その日は、ものすごく寒かった。あまりに寒かったからだろう、籠先生が、朝おっちゃんに会った時に、

「おっちゃん、寒いなあ」

と、言った。言った後で気がついて、しまったという顔をしていた。しかし、おっちゃんは

「おお、さみいなあ」

と言った。籠先生はびっくりした。見ていたぼくたちも

びっくりした。

そこで、りようたが、おっちゃんのところに行って、いった。おっちゃんの顔を見上げて、

「おっちゃん、おはよう」

「お、おはようー」

とあいさつをかわしてから、

「おっちゃん、寒いなあ」

と、言ってみた。どきどきした。

「お？ さみいなあー」

返事が返ってきた。りようたは大急ぎで籠先生のところに行って来た。

「先生。おっちゃん、ぼくにも 寒いなあ、言うたわ。

すげー」

何がどうすごいのかはよくわからないが、おっちゃん

に「寒いなあ」とあいさつするのが、しばらく流行った。返事してくれる時もあったし、取り合ってくれない時もあった。

その翌日だっただろうか。朝来て、としなが言った。

「先生、あのな、今日、南村でお葬式やで」

「あら、お葬式？」

「うん。あんな、ラジオのおっちゃんのおねえさんが亡くなつたんやて」

「え？ おっちゃんにおねえさんがおつたん？」

その日、幼稚園の前を通りかかった、こうちゃんのおばあちゃんに籠先生が聞いた。

ラジオのおっちゃんには、歩いたり、車椅子に乗ったりしないおねえさんがおつたそうだ。おととい亡くなつたそうだ。

そのあまり動けないおねえさんのところに毎日ごはん

を運ぶのが、おっちゃんの仕事だったのだそう。ごはんを作ってくれるのは、おっちゃんの弟の奥さん。そうそう、おっちゃんは、近所の家に牛乳を配達するという仕事もしているという。

おっちゃんは、遠くまで歩いていっても、おねえさんにごはんを運ぶために、必ず昼前には家に帰っていたそう。時間にとってもきちょうめんなのだそう。

「ああ、それで、おっちゃんは毎日きちんとラジオ体操の時間に幼稚園に来るんだー」またまた籠先生が感心している。

昼頃、おっちゃんが幼稚園の前に現れた。

「おっちゃん、おはよう。おっちゃん、お葬式は終わったの？」

籠先生が聞いたけど、おっちゃんは返事をしなかった。さびしそうな顔に見えたのは気のせいだろうか。

(保育研究グループ はるにれ)